

その他

山田原欽「萩八景」詩訳注

鎌田 出*1

はじめに

本稿は、「絹本淡彩八江萩八景図巻」に記載される山田原欽「萩八景」詩^{註1)}の訳注である。

貞享二(1685)年春、萩藩三代藩主毛利吉就は、萩の佳景であった「八江」が、人々に広く知られながらもその景色が未だ具体的な姿を表せないことから、「瀟湘八景」の題目をそれぞれの景色に充てることを命じた。「八江」のすべてに風情ある題目を定めることができると、雲谷等璠に絵を、安部春貞に和歌を、そして山田原欽に「唐絶」すなわち漢詩(絶句)の作成を命じた^{註2)}。こうして生まれたのが、現在山口県防府市にある毛利博物館に所蔵される「絹本淡彩八江萩八景図巻」である。なお、その意義については拙論「『萩八景』序論—日本における瀟湘八景定着過程を考察する手がかりとして—」^{註3)}を参照されたい。

ここに詠まれる「萩八景」は、江戸時代にその数を急激に増やし、全国に広がった「八景」の中では、江湖に知られる「金沢八景」とほぼ同時期の江戸時代前期に設定されたものに属し、設定年が文献により明らかであると共に、当該八景を描いた「八景画」の残る貴重な「八景」の一つである。加えて、「江戸時代の古地図で歩けるまち」^{註4)}である萩市であるがゆえに、設定当時の位置を現在の景観の中に比定できる数少ない「八景」でもある。

このような「萩八景」さらには「萩八景」詩は、江戸時代以降、日本各地に数量的且つ空間的に拡大した「八景」の設定に際して、「瀟湘八景」が生み出した古典的教養としての風景(文化的景観)が、実景の上にもどのように見立てられたかを解明する手掛かりとなり得るものである。本稿は、その一助たらんことを願うものである。

凡例

- 一、底本には、毛利博物館所蔵「絹本淡彩八江萩八景図巻」を用いた。文字の読み取りに当たっては、前毛利博物館館長(現同博物館顧問)小山良昌氏の「『八江覇城名所図会』の正誤について」^{註5)}を参照した。
- 二、原文に関しては、山田原欽『復軒詩藁』^{註6)}を始めとする諸本を参照したが、列記することはせず、言及箇所においてそれぞれ示すこととする。
- 三、訳注は、一首毎に詩題を示した上で、①原文、②訓読、③注釈、④訳文の順で記述し、詩題のみはゴシック体の太字とした。
- 四、本文、訓読及び語釈部分は、原則として引用文も含めて新漢字を使用した。但し、「峯・峰」「烟・煙」など、原文の趣を考え例外的に対処した箇所がある。また、「弁」(辯・辨)のように意味上の混乱を生じる場合など、部分的に新漢字を用いなかった箇所もある。

「倉江帰帆」

①原文

地挹遠天三面開
水浸数島一帆廻
倉江風熟潮生駛
疑是仙查銀漢来

②訓読

地 遠天を挹ひきて三面開き
水 数島を浸して一帆廻る
倉江 風熟して潮生じて駛はやし
疑うらくは是れ仙查銀漢より来たるかと

*1 至誠館大学 ライフデザイン学部

③語釈

「倉江」…『八江瀨城名所図画』（一之巻 夏之部上）

註⁷に「八江瀨城八勝の一にして、眺望殊に壯豁の地なり」とする。現在の萩市大字山田倉江に地名が残っている。橋本川河口の辺り。

「～帰帆」…沈括『夢溪筆談』（巻十七）に載せる宋・宋迪の「瀟湘八景」の原題註⁸は「遠浦帰帆」。

「挹遠天」…「挹」は「引き寄せる」意。遠くの空を引き寄せる。陸（現在の西の浜）からの眺めを言い、眼前に広がる海と空との一体感を表す。

「三面開」…「三面」は「三方」の意。西の浜からの実際の眼前の眺望は、東は指月山に遮られて北と西のみだが、それに引き寄せた「遠天」を加えて「三面」とする。

「浸」…『長門金匱』註⁹及び『八江瀨城名所図画』所収の「倉江帰帆」は、いずれも「漫」に作るが、共に「ひたす」意は変わらない。「数島」が水面に浮かぶ様を言う。『復軒詩藁』（貞享三年）註¹⁰に載せる原欽「七月八日遊口羽就良亭」に、「堂就崎嶇俯千樹、海浸島嶼鬱參差（堂は崎嶇に就き千樹俯し、海は島嶼を浸して鬱として參差たり）」とある。

「数島」…「淡彩八江萩八景図巻」には、「赤鼻」「黒崎」二つの岬とともに、遠景に「鯖島」、近景に「松島」及び複数の岩礁が描かれている。「数島」とはこれらを指す。

「風熟」…「熟」は、程度が進んだ様子を言う。元・釈善住「贈叔恭」詩（『谷響集』巻二）に、「樵逕雪晴芒屨出、江橋風熟布帆開（樵逕 雪晴れて芒屨出で、江橋 風熟して布帆開く）」とある。風が十分に吹いている。

「潮生駛」…「潮生」は、波が立つこと。宋・王安石「招葉致遠」詩（『臨川文集』巻二十八）に、「明朝若有扁舟興、落日潮生尚可還（明朝若し扁舟の興る有らば、落日に潮生じ尚還る可し）」とある。「駛」は、馬が速く走ることを言い、ここでは波

の速さを表す。原欽「薩埵山」（天和二年）に、「乱山雲鎖千季事、落日風生万里潮（乱山 雲は鎖す千季の事、落日 風は生ず万里の潮）」とある。

（風によって）速い波が立つ。

「疑是」…推量（～ではと疑う）の意を表す副詞。

「仙查」…「仙槎」に同じで、仙人の乗るいかだ。唐・白居易の『白孔六帖』（巻二 天河）「仙查」に、「博物志旧説天河与海通（博物志の旧説に天河は海と通ず）」とあり、「浮查」に乗って天の川で織女と牽牛に会う話を載せる。同様の話として、宋・周密『癸辛雜識』（前集）に『荆楚歲時記』を引き、漢武帝の命で張騫が槎に乗って黄河の源を訪ねたところ、織女と牽牛に出会った話を載せる。なお、『復軒詩集』（天和四年）に載せる原欽「七月朔日従邦君遊越浜」に「秋来漫擬浮查去、河漢無雲落浪花（秋来たりて漫りに擬す浮查の去るに、河漢雲無く浪花を落とす）」とあるのは、この故事を用いている。

「銀漢」…天の「漢江（「漢水」。長江最大の支流）」の意で、天の川（銀河）を言う。「漢江」は、天の川が天を南北に横切ると同様、地上を北から南に流れており、両者はそのために関連付けられる。

④通釈

大地ははるか彼方の大空を引き寄せ、北と西に開ける海と合わせて、三方に広大な視野が開け、海の水は松島や鯖島を浮かべ、その中を一艘の帆掛け船が港へと戻って行く。

ここ倉江では、風が十分に吹いて波を生み出し、その波とともに船は滑るように水面を進む。

その船の進む様子は、まるで織女や牽牛のいる天の川から仙人の乗るいかだがやっけて来たかのようだ。

「玉江秋月」

①原文

玉江一片秋
明月入晴流
夜静人回首
漁村烟霧収

②訓読

玉江 一片の秋
明月 晴流に入る
夜静かにして人首を^{めぐら}回せば
漁村 烟霧収まる

③語釈

「玉江」…常盤大橋を西に渡り切った、萩市大字山田玉江浦一帯。地区名としての「玉江」は、玉江川を国道191号線沿いに長門方面に入ったところに位置するが、「玉江駅」「玉江橋」等、橋本川沿いにも「玉江」の名は数多く残っている。『八江瀨城名所図画』（二之巻 夏之部上）には、「八江萩八勝の一にして、殊に葉月の比は詞人吟客ここに群游して月をもてあそぶ」とある。なお、「絹本淡彩八江萩八景図巻」は、現在の常盤島辺りから対岸の玉江浦2区にある観音院一帯を描いている。また、『長門金匱』は、往古より萩にあった「八江八景」の「鐘江秋月」が「玉江川尻」であるとす。

「～秋月」…「瀟湘八景」の原題は「洞庭秋月」。「洞庭」は、湖南省北部にある「洞庭湖」で、湘水、資水、沅水、澧水の四水が注ぐその一帯は、古来名勝として知られる。

「一片秋」…『才調集』（巻七）に載せる唐・趙嘏「自遣」詩に、「江連故国無窮恨、日帯残雲一片秋（江は故国に連なり恨み窮まり無し、日は残雲を帯ぶ一片の秋）」とあり、秋を詠む詩語として宋代以降の詩に数多く見受けられる。また、「瀟湘」と

結びついた「瀟湘一片秋」という表現も、例えば『御定歴代題画詩』（巻十四）に載せる宋・裘万頃「題老悟画卷」詩に「归来喜色驚鄰里、分得瀟湘一片秋（帰り来れば喜色鄰里を驚かす、分ち得たり 瀟湘一片の秋）」とあるなど、散見される。この「瀟湘一片秋」という表現が踏まえられている可能性もある。

なお、「一片」は、「ひとひら・ひとかけら」等の小さなまとまりを基本的意味とするが、「秋」は言わば不可算名詞であるので、ここでは「一面の・一頻り」の意がふさわしい。「一片」の解釈については、『校注 唐詩解釈辞典』（pp.652～653）も参照されたい^{註11}。一面の秋の気配。

「明月」…曇りのない明るい月。望月。班婕妤「怨歌行」詩（『文選』巻十四）に、「裁為合歡扇、團團似明月（裁ちて合歡の扇と為す、團團として明月に似たり）」とある。

「晴流」…大修館書店『大漢和辞典』^{註12}には載せず。『復軒詩藁』をはじめ、『御国廻御行程記』^{註13}以外は「清」に作る^{註14}。原欽「高台夕照」（貞享四年）に「微陽冉冉下晴流、一半高台照未収（微陽冉冉として晴流に下り、一半の高台 照らして未だ収めず）」とあり、魯魚の誤りではない。用例としては『御定歴代題画詩』（巻十五）に載せる明・林俊「題子野画」詩（『石倉歴代詩選』巻四百十五）に、「古樹蔵紆径、晴流帶遠峰（古樹 紆径を蔵し、晴流 遠峰を帯ぶ）」とある。なお、「高台夕照」は、自注によれば「八景詩」である^{註15}。雨が上がった川。川は、玉江の東を流れて海にそそぐ橋本川。

「回首」…振り返る。唐・劉禹錫「洛中春末送杜録事赴蕪州」詩（『全唐詩』巻三百六十五）に、「君過牛橋回首望、洛城猶自有殘春（君牛橋を過ぎて首を回らせて望まば、洛城猶お自ら残春有り）」とある。

「漁村」…「絹本淡彩八江萩八景図巻」と『御国廻御

行程記』より、観音院との位置関係から現在の玉江浦漁港（常盤大橋の西端）に比定が可能である。

「烟霧」…「けむり」ではなく、けむり状の「もや・きり」のこと。唐・王勃「寒夜懷友雜體二首 其二」詩（『全唐詩』卷五十六）に、「北山烟霧始茫茫、南津霜月正蒼蒼（北山の烟霧始めて茫茫、南津の霜月正に蒼蒼）」とある。「烟」は「煙」の異体字。ここでは、雨が上がったあとの「もや」を言う。

「収」…雨上がりのもやが消える。明・劉崇「賦得臨清亭四時詞四首就録奉寶逸士 其三」詩（『槎翁詩集』卷七）に、「虚度山頭宿霧収、夜来風雨報新秋（山頭を虚度すれば宿霧収まり、夜来の風雨新秋を報ず）」とある。

④通釈

玉江は一面秋の気配、
秋の曇りない満月が、雨が上がった橋本川の川面に
映る。
ひっそりと静まり返った夜、振り返ってみると、
玉江浦の漁村にかかっていたもやがすっかり消えていた。

「桜江暮雪」

①原文

雪満桜江更問津
晩来舟子訝行人
風回偏惜入波碎
楫転何妨压笠頻

②訓読

雪は桜江に満ちて更に津を問う
晩来 舟子行人を訝ふ
風回りて偏へに惜む 波に入りて碎くるを
楫を転じて何ぞ妨げん 笠を压すること頻なるを

③語釈

「桜江」…現在の面影山の北麓、橋本川を挟んで萩市大字河添の河川公園の対岸一帯。『風土注進案』（當島宰判 椿西分^{註16}）に「桜江渡船貳艘」とあり、『御国廻御行程記』では「淵崎」（現在の川添河川公園の辺り）に「渡し場」が記載されている。「絹本淡彩八江萩八景図巻」にも渡し場と渡し船が描かれている。なお、『御国廻御行程記』は面影山を「桜山」と記し、桜江の名の由来を載せている。『八江瀾城名所図画』（二之巻 夏之部上）は、「八江萩八景の一にして、尤も風光を貯へり。（中略）渡守を呼ばふ声は深雪の中に埋れて、面影山の姿のみ所得顔なるも亦奇なりとすべし」とする。

「～暮雪」…「瀟湘八景」の原題は「江天暮雪」。「江」は、第一義として「長江」を連想させる語だが、ここでは広く「川」の意で用いられている。

「問津」…「津」は、渡し場。「問津」は、一般に『論語』（微子篇）に載せる孔子が子路に渡し場を訪ねさせた故事——人に教をを請う——を連想させる表現だが、この詩ではその連想に結びつかない。『復軒詩藁』（延宝七年）に載せる原欽十四歳の作である「江天暮雪」^{註17}に、「銀界茫然馬馬上、無人知道渡江津（銀界茫然たり 帰りて馬に上る、人の江を渡る津を^し知る無し）」とあり、「暮雪」と「津」を結びつける発想が若い頃から既にあったことが分かるものの、この詩においても『論語』の故事を踏まえてはいない。十四歳で藩主毛利吉就公に「講論経籍」した原欽^{註18}が「問津」の故事を知らぬはずはなく、「絹本淡彩八江萩八景図巻」でも描かれた実際の「渡し場」を念頭に、単にそれを詠んだと考えるべきであろう。同様に、「狩野某」が描いた八景にも、やはり「津」が描かれていたと推測される。この桜江の渡し場は、「慶安五年萩城下町絵図」^{註19}では「桜舟渡」として記載されている。

「舟子」…船頭。唐・杜甫「遣遇」詩(『全唐詩』卷二百二十三)に、「舟子寢寢食、飄風争所操(舟子 寢食を寢し、飄風 操る所を争ふ)」とある。

「行人」…旅人。唐・王昌齡「旅望」詩(『全唐詩』卷一百四十三)に、「窮秋曠野行人絶、馬首東来知是誰(秋窮まりて曠野に行人絶へ、馬首は東より来たりて是れ誰なるかを知らん)」とある。

「訝」…ここでは「迎えねぎらう」意。唐・賈島「送貞空二上人」詩(『全唐詩』卷五百七十二)に、「慙懃此別、且未定帰期(慙懃に此の別れを訝へ、且くは未だ帰期を定めず)」とある。

「偏惜」…ひどく残念に思う。元・張伯淳「送趙寿卿赴広西書吏」詩(『養蒙文集』卷九)に、「人到中年偏惜別、不禁対雨聴陽関(人中年に到りて偏へに別れを惜しみ、雨に対して陽関を聴くに禁へず)」とある。

「楫転」…「楫」は、船を漕ぐための道具。「絹本淡彩八江菰八景図巻」には「櫂」ではなく「櫓」が描かれている。「転」は、「櫓」を左右に振って舟を進める様を言う。唐・張籍「舟行寄李湖州」詩(『全唐詩』卷三百八十四)に、「藻密行舟汎、湾多楫轉頻(藻密にして行舟汎く、湾多くして楫轉頻りなり)」とある。櫓を動かす。

「压笠頻」…ここでは、雪が船頭の笠に絶え間なく降り積もる様を言う。『世宗憲皇帝御製文集』(卷二十七)に載せる「耕図二十三首 其四 耙耨」詩に、「压笠低雲影、鳴簑乱雨声(笠を压して雲影低く、簑を鳴らして雨声乱る)」とある。

④通釈

一面雪景色の桜江で、再度、渡し場を尋ねてみた。夕方になり、船頭がやってきて旅人をねぎらい迎える。

雪が風に吹かれて、橋本川の波に落ちて砕けてしまうのがひどく残念だ。

舟を急がせ、笠に雪を積もらせずともよいのに。

「小松江晚鐘」

①原文

断霞夕竹峯
深寺度疎鐘
纒纒春江水
平吞楼外松

②訓読

断霞 夕の竹^{註20}峯
深寺 疎鐘^{わた}渡る
纒纒たり春江の水
平吞す 楼外の松

③語釈

「小松江」…現在の萩市大字椿青海の辺り。『八江瀨城名所図画』(卷之二 夏之部上)には、「八江萩八勝の一にして、風景黄昏を尤も佳とす」とある。烏田智庵が享保の頃に著したとされる『萩古実未定之覚』^{註21}に、「川上よりの流水螢火山の下より南明寺の麓小松江の方へ行」とある。『御国廻御行程記』にも南明寺から濁淵(現在のJR萩駅周辺。萩市大字椿濁淵)、青海(現在の萩市民病院の辺り。萩市大字椿青海)を通り、大照院前の潮入に抜ける川が描かれており、現在の大屋川の川筋と一致する。なお、この川は「慶安五年萩城下町絵図」には見えず、大照院再建後に農業用水確保のために作られたものであるという^{註22}。

「～晚鐘」…「瀟湘八景」の原題は「煙寺晚鐘」。「煙寺」は、日本ではしばしば「遠寺」とされる。これは、「煙」が日本では第一義として火をたくと出る「けむり」と理解され、「もや・きり」として認識し辛かったため、同音の「遠」に置き換えられたものと考えられる。

「断霞」…「霞」は、ここでは夕焼けを言う。切れ切れの夕焼け。宋・張耒「福昌雜詠五首 其五」詩(『柯山集』卷十八)に、「満目凄凉供客愁、断霞

残照想滄洲(満目凄凉として客愁を供へ、断霞残照 滄洲を想ふ)」とある。また、原欽「三保浦」(天和二年)に、「木末淡煙帯海微、征衫晩傍断霞帰(木末の淡煙海を帯びて微かなり、征衫は晩に傍ひて断霞帰る)」とある。

「竹峰」…竹の生い茂る峰。『大漢和辞典』には載せず。「絹本淡彩八江萩八景図巻」で大照院の左奥に描かれているのは、獄観音の手前にある有明ヶ山だが、「絹本淡彩八江萩八景図巻」『御国廻御行程記』共に竹林らしきものは描かれていない。一方、「慶安五年萩城下町絵図」には観喜院(大椿山観喜院。霊椿山大照院の前の名前)の周囲に竹林らしきものが描かれている。『長門金匱』に「萩ハ以の外田舎にて川上より今の御城下までハ竹木茂り」とあり、原欽は実際の景色を念頭に「竹峰」の表現を着想したと思われる。

「度」…「渡」に当てる。ここでは、鐘の音が彼方から響き渡ってくることを言う。

「疎鐘」…「疎」は、まばら。時折聞こえる鐘の音。ここでは大照院の鐘の音を言う。唐・王維「酬郭給事」詩(『全唐詩』卷一百二十八)に、「禁裏疎鐘官舎晩、省中啼鳥吏人稀(禁裏の疎鐘 官舎おそ晩く、省中の啼鳥 吏人稀なり)」とある。また、原欽「高良山十景詩 其九」(貞享二年)に、「風送疎鐘落霞外、依然山谷鎖輕烟(風は疎鐘を送る落霞の外、依然として山谷輕烟を鎖す)」とある。「疎」は「疎」に同じ。

「縵縵」…広々と延びている様子。横田惟考の『戦国策正解』(卷七上)に、「周書曰、綿綿不絶、縵縵奈何(周書に曰く、綿綿として絶えず、縵縵として奈何せん)」とあり、注に「綿綿微細也。縵、史記作蔓。蓋通借。蔓延也。言微細不絶、滋蔓難除也(綿綿は微細なり。縵、史記蔓に作る。蓋し通借ならん。蔓は延なり。言うところは微細にして絶えず、滋蔓にして除き難きなり)」とある。

「平呑」…飲みつくす。宋・陸游「卯飲醉臥枕上有賦」

詩(『劍南詩藁』卷十三)に、「雨勢平呑野、風声倒卷江(雨勢 野を平呑し、風声 江を倒卷す)」とある。大照院の鐘楼を取り巻く松林を飲み尽くすかのように橋本川の水が迫っている様子を言う。

④通釈

夕焼けに染まる切れ切れのもやが、日暮れの竹峰にかかっている。

林の奥深くにある大照院の鐘の音が、途切れ途切りに響き渡る。

春の橋本川の水は、どこまでも続き、鐘楼を取り巻く松林を飲み尽くすかのよう。

「上津江晴嵐」

①原文

上津江上斂秋霖
度嶺嵐光浮乍沈
旋与扁舟傍灘落
日登丈五翠猶深

②訓読

上津江上 秋霖斂まる
嶺を度る嵐光 浮きて乍ち沈む
旋りて扁舟と灘に傍ひて落つ
日は丈五に登りて 翠猶お深し

③語釈

「上津江」…『風土注進案』(當島宰判 河島庄)によれば、「河嶋庄之内小名」「中津江村之内」にあった。『御国廻御行程記』が記載する「中津江」は、阿武川に面した萩市大字椿東中津江にある龍蔵寺の辺りであり、上津江はさらに阿武川を遡ったところに位置したと思われる。現在は、上津江浄水場にその名を残している。

『八江瀾城名所図画』(参之卷 夏之部下)は、「八江菽八勝の一にして風光最も奇観なり」とする。「淡彩八江菽八景図巻」では、阿武川が大きく左方向に曲がった様子が描かれており、現在の菽市大字椿東霧口及びその対岸の菽市大字椿東目代一帯を中津江側から眺めた景色であると比定できる。なお、『御国廻御行程記』には「上津江」の名も「上津江晴嵐」詩も書き込まれていない。

「～晴嵐」…「瀟湘八景」の原題は「山市晴嵐」。「山市」は、山間の人々の集まる場所、山間の町の意。「晴嵐」…晴れた日に、陽光で蒸発した山気が立ちのぼること。ここでは朝霧を言う。唐・鄭谷「華山」詩(『全唐詩』卷六百七十五)に「峭仞聳巍義、晴嵐染近畿(峭仞 聳ゆること巍巍たり、晴嵐 近畿を染む)」とある。霧口一帯では、今でも立ちこめる朝霧の佳景を見ることができる。

「秋霖」…秋の長雨。「霖」は、三日以上続く雨のこと。原欽「九月十四日陪邦君遊洞春寺」(貞享三年)に「秋霖一霽遠江天、寒日煦煦樓閣辺(秋霖^{いつ}一に霽れて江天遠し、寒日煦煦たり樓閣の辺)」とある。

「斂」…雨が上がることを言う。唐・殷曉藩「李舍人席上感遇」詩(『全唐詩』卷四百九十二)に、「微雲斂雨天氣清、松声出樹秋冷冷(微雲 雨を斂め 天氣清く、松声 樹を出でて冷冷たり)」とある。また、原欽「中元即事得層字」(元禄二年)に、「瓦楼斂斜雨、銀漢掛長氷(瓦楼 斜雨を斂め、銀漢 長氷を掛く)」とある。

「度嶺」…「度」は「渡」に同じ。「嶺」は「峰」に同じだが、この七言詩は「平起(正格)」で第二句二字目は仄音とする必要があり、平音の「峰」(平声)の代わりに仄音の「嶺」(上声)を用いている。(嵐光が)峰々に広がる。

「嵐光」…山にかかるもやに日光が映じること。唐・鄭谷「蜀中三首 其二」詩(『全唐詩』卷六百七

十六)に、「夜無多雨曉生塵、草色嵐光日日新(夜に多雨無く曉に塵を生じ、草色嵐光日日新なり)」とある。また、原欽の八景詩である「山市晴嵐」(延宝七年)及び「愛宕晴嵐」(貞享四年)には、共に「嵐光」が詠み込まれている。

「乍」…「～したと思うとすぐに…」意を表す副詞。

「たちまち」と訓じる。

「扁舟」…小舟。唐・孫逖「夜宿浙江」詩(『全唐詩』卷一百十八)に、「扁舟夜入江漂泊、露白風高氣蕭索(扁舟夜に入りて江漂泊たり、露白く風高く氣蕭索たり)」とある。また、原欽「水楼晚望」(延宝六年)に、「郷情殊未忘、唯恨欠扁舟(郷情殊に未だ忘れず、唯だ恨む扁舟の欠けたるを)」とある。

「傍灘」…「灘」は早瀬のこと。早瀬に沿って。唐・孟雲卿「卞河阻風」詩(『全唐詩』卷一百五十七)に、「出浦風漸惡、傍灘舟欲横(浦を出れば風漸く惡し、灘に傍ひて舟横ならんと欲す)」とある。

「日登丈五」…唐・盧仝の「走筆謝孟諫議寄新茶」詩(『全唐詩』卷三百八十八)に、「日高丈五睡正濃、將軍打門驚周公(日高く丈五 睡正に濃たり、將軍門を打ちて周公を驚かす)」とあるのを踏まえる。この詩は南宋・祝穆の撰した類書『古今事文類聚』(後集卷二十一)の「肖像部 睡眠」で引かれる他、江戸時代に広く読まれた詩学書の『詩林広記』(前集卷之八)や『詩人玉屑』(卷之十五)にも引かれる。太陽が起床すべき時間の高さまでに登ったことを表現する。宋・程俱の「雪中口占二首 其一」詩(『北山集』卷十一)に、「日高丈五猶庸起、庭竹枝低掃玉塵(日高く丈五にして猶ほ起きるに^{ものう}庸く、庭竹枝低くして玉塵を掃う)」とある。なお、唐代の一丈は約3.1メートルで、「丈五(=一丈五尺)」は約4.6メートルとなるが、ここでは具体的な高さを表すものではない。日が丈五の高さまでのぼる。

④通釈

上津江の阿武川では、秋の長雨もあがった。
峰々を包む朝もやは、浮いたと思えばすぐに沈んでゆく。
もやは翻り、やがて小舟とともに早瀬に沿って落ちて消える。
日が五丈の高さまでのぼったというのに、山の緑はまだ水気を含んで深い色をたたえている。

「中津江夜雨」

①原文

雲気四山横
渡頭雨暗生
蕭然不能寐
一夜打簾声

②訓読

雲気 四山に横たはり
渡頭 雨暗に生ず
蕭然として寐ぬる能わず
一夜 簾を打つ声

③語釈

「中津江」…『八江瀨城名所図画』（参之卷 夏之部下）は、「八江萩八景の一にして風致あり」とする。
『八江瀨城名所図画』で描かれる山の稜線について、樋口尚樹氏は「藍場川の取水口付近から眺めた景色」とする^{註23}。「絹本淡彩八江萩八景図巻」では、中国山水画に見られる屹立した山に近い稜線が描かれており、実景比定の材料とはし難い。
しかし、全体の構図を見ると、『御国廻御行程記』に描かれた中津江一带と近似した構図を見出すことができ、阿武川が橋本川と分岐する辺りから龍蔵寺後方の十本松山方向を描いたものと推測される。なお、中津江については「上津江晴嵐」

の「上津江」も参照されたい。

「～夜雨」…「瀟湘八景」の原題は「瀟湘夜雨」。

「雲気」…ここでは「雲のような気」ではなく、雲を言う。唐・杜甫「楠樹為風雨所拔歎」詩（『全唐詩』卷二百十九）に、「東南飄風動地至、江翻石走流雲氣（東南の飄風地を動かして至り、江は^{ひるがへ}翻り石は走り雲気流る）」とある。

「四山」…四つの山、または四方の山。ここでは視界に入る全ての山を言う。唐・許渾「晨装」詩（『全唐詩』卷五百二十八）に、「雲卷四山雪、風凝千樹霜（雲は巻く四山の雪、風は凝らす千樹の霜）」とある。

「渡頭」…船の渡し場の辺り。唐・柳宗元「雨晴至江渡」詩（『全唐詩』卷三百五十二）に、「渡頭水落村逕成、撩乱浮槎在高樹（渡頭水落ちて村逕成り、撩乱する浮槎高樹に在り）」とある。

「暗生」…人知れずひっそりと生じる。唐・元稹「解秋十首 其一」詩（『全唐詩』卷四百二）に、「翳翳林上葉、不知秋暗生（翳翳たり林上の葉、知らず 秋の暗に生ずるを）」とある。

「蕭然」…もの寂しい様子。唐・吳融「汴上晚泊」詩（『全唐詩』卷六百八十四）に、「蕭然正無寐、夜櫓莫啞啞（蕭然として正に寐ぬる無く、夜に櫓は啞啞する莫し）」とある。

「寐」…寝る。

④通釈

雨雲が山々を覆い、
渡し場の辺りでは静かに雨が降り出した。
もの寂しさに寝付けないうまま、
簾を打つ雨音が一晩中続いていた。

「下津江落雁」

①原文

旅雁秋高停未征
一汀水気接天清
問渠縁底謾来去
不耐寒江万里情

②訓読

旅雁 秋高く停りて未だ征かず
一汀 水気は天に接して清らかなり
渠かほに問う 底なぞに縁りてか謾みだりに来去すると
寒江 万里の情に耐えず

③語釈

「下津江」…「上津江」と同じく中津江村にあったが、「下津江」の地名は現在では残っていない。『八江瀾城名所図画』（六之巻 冬之部）は、「八重萩八勝の一にして、風光さなから画図に異ならず」とする。『御国廻御行程記』は地名とともに萩八景詩を載せるが、「上津江晴嵐」と「下津江落雁」の二首を欠いている。このうち「上津江晴嵐」については、上津江が『御国廻御行程記』の描く地域外（龍蔵寺よりさらに阿武川上流）に位置するため、地名とともに欠けている理由が成り立つ。

しかし、「下津江」は本来描かれてよい場所に位置していたはずだが、『御国廻御行程記』では「中津江」に続くのは「下津江」ではなく「上野」（現在の萩市大字椿東上野に名を残す。なお、「上野」は「河島庄」ではなく「椿東分」に属する）である。『風土注進案』（當島宰判 河島庄）には「下津江 江添」とあり、人家の存在しない「川沿い」の一角であった。このため、萩八景が設定された貞享二年から約 60 年後の『御国廻御行程記』作成当時において、「下津江」の場所を比定できなかったとも考えられる。しかも「藩主の観賞用であったと推察される」（川村博忠）^{註24} 絵図

であれば、藩の絵図方として『御国廻御行程記』を作成した有馬喜惣太が不正確な記述を避けたとしてもおかしくはない。

「下津江」の場所を特定するためには、「淡彩八江萩八景図巻」、『八江瀾城名所図画』及び『御国廻御行程記』に拠るしかない。これらのうち『八江瀾城名所図画』の絵図については、樋口尚樹氏が現在の土原の松本川の川岸より見た景色との類似を指摘されるが^{註25}、「淡彩八江萩八景図巻」では山の稜線が『八江瀾城名所図画』とは大きく異なっている。『御国廻御行程記』によれば、「下津江」を含む「中津江」は「上野」よりさらに松本川上流にあり、現在の土原よりは川島（萩市大字川島）から眺めたと思われる。また、『八江瀾城名所図画』が 10 軒ほどの人家を描いているのに対して、「淡彩八江萩八景図巻」は 5 軒の人家を描くのみである。『風土注進案』（當島宰判 河島庄／椿東分）は、人家の数を「上津江 人家九軒／中津江 同七件」（河島庄）、「上野人家四拾八軒アリ」（椿東分）と記しており、その規模には差が大きい。これらのことから、萩八景に描かれた「下津江」は、「中津江」の「上野」寄りの松本川沿いで、現在の中津江橋辺りの川島側から対岸に位置していたと思われる。

「～落雁」…「瀟湘八景」の原題は「平沙落雁」。「平沙」は、広い砂原を言う。原欽「江上晚望」（延宝五年）に、「独立寒風時極目、平沙渺渺荻花秋（独り寒風に立てば時に目を極む、平沙渺渺たり荻花の秋）」とある。

「旅雁」…旅をする雁。雁は、秋になると越冬のために南に飛来し、春になると北に戻ってゆく。「中国古典文学の世界では、雁の越冬地は、衡山と洞庭湖に挟まれたところ、つまりいわゆる瀟湘の地とされてきた」^{註26} という。原欽「早春」（延宝五年）に、「燕子未来雁先去、但聞黄鳥轉斜陽（燕子未だ来らず雁先に去る、但だ黄鳥の斜陽に轉るを

聞く）」とあり、春になって北に帰る雁を詠んでいる。

「秋高」…秋の空が高いこと。唐・杜甫「茅屋為秋風所破歌」詩(『全唐詩』卷二百十九)に、「八月秋高風怒号、卷我屋上三重茅(八月秋高くして風怒号す、我が屋上三重の茅を卷く)」とある。

「一汀」…「汀」は、川の中洲。「淡彩八江萩八景図巻」では、中洲に羽を休める雁の姿が描かれている。宋・陸游「秋夜泊舟亭山下」詩(『劔南詩藁』卷十七)に、「一汀蘋露漁村晚、十里荷花野店秋(一汀蘋露 漁村の晩、十里荷花 野店の秋)」とある。

「水気」…ここでは水のことで、松本川の流れを言う。唐・杜甫「送裴二虯作尉永嘉」詩(『全唐詩』卷二百二十四)に、「孤嶼亭何処、天涯水氣中(孤嶼亭 何れの処ぞ、天涯 水気の中)」とある。

「問渠」…「渠」は代名詞「かれ・それ」。ここでは雁を指す。雁たちに問う。

「縁底」…「縁」は「寄り従う」ことで、原因・理由を言う。「底」は疑問代名詞で「何」に同じ。唐・王維「愚公谷三首 其二」詩(『全唐詩』卷一百二十六)に、「縁底名愚谷、都由愚所成(底に縁りてか愚谷と名づく、都て愚の成す所に由る)」とある。どうして・どのような理由で。

「謾」…『復軒詩藁』、『長門金匱』、『風土注進案』(當島宰判 河島庄)に載せる「下津江落雁」は、いずれも「漫」に作る。「淡彩八江萩八景図巻」では楷書体で書かれており、「さんずい」ではなく「ごんべん」であることは明らかである。しかし、「謾」の基本義「あざむく・あなどる」では文意が通じない。ここでは「漫」に通じる「みだりに」で訓じ、「とりとめもなく・無駄に」の意で解釈する。なお、管見の限りでは『復軒詩藁』に「謾」の用例は見出せない。

「万里情」…「万里」は、はるか遠いことで、故郷から遠く離れていることを言う。遠い故郷を思う気

持ち。元・陳高「家書不至」詩(『不繫舟漁集』卷五)に、「骨肉三年別、郷関万里情(骨肉 三年の別れ、郷関 万里の情)」とある。

④通釈

旅をする雁たちは、秋の高い空の下、まだ南へ飛ぼうとしない。

松本川の中洲は、水が空のように清らか。

おまえたちに問う、どうして意味もなく行ったり来たりするのかと。

寒々とした川の中、はるか故郷を思う気持ちに耐えられないというのか。

「鶴江夕照」

①原文

斜陽宜曬網
一半鶴江紅
島影委波永
寒潮湧遠空

②訓読

斜陽 網を曬すに宜しく
一半 鶴江紅なり
島影 波に委ねること永く
寒潮 遠空に湧く

③語釈

「鶴江」…現在の萩市大字椿東鶴江にその名前が残っている。鶴江台は、「慶安五年萩城下町絵図」では「鶴井壇」と表記されているが、「貞享年間萩城下町絵図」^{註27)}では「鶴江壇」となっている。『御国廻御行程記』には「鶴江浦」の名が記され、「鶴江ハ往古雌雄ノ鶴巢籠リシ故鶴江ト唱ヘシヨシ里人ノ説ナリ」と名前の由来を記している。この『御国廻御行程記』に記された「渡し場」が

現在でもほぼ同じ場所で運営される等、萩八景の中では最も古の姿を伝えている景色と言える。

『八江瀨城名所図画』(六之巻 冬之)は、「所謂八江瀨城八勝の一にして、出入の白帆は、霞に見え隠れて波とも欺き、篝たく海士小舟の沖に連なりて短夜の明を知らず(中略)実に四時の風光さながら画中に髣髴たり」とする。また、『長門金匱』は往古の「八江八景」の「兼江夕照」がこの地であったとする。

「～夕照」…「瀟湘八景」の原題は「漁村落照」。「落照」も「夕照」もともに「夕陽・夕焼け」の意だが、瀟湘八景詩の代表作として広く流布した「玉潤作瀟湘八景図」の賛詩(二首)も、共に「夕照」に作る。我が国では「落照」ではなく「夕照」が通行する。

「曬網」…「曬」は、日光に当てて乾かすこと。漁で用いた網を干す景色は、それにより題意と情景の意味を表す、「漁村落照」で多用されるモチーフである。「淡彩八江萩八景図巻」でも、家の前で網を干す様子が描かれている。

「一半」…半分。ここでは鶴江台(鶴江浦)の西半分が夕陽に赤く染まっている様子を言う。原欽「田園雜興」(天和四年)に、「度鳥雲逾^{いよいよ}白く、落暉に山は半ば紅なり」とあるのが同じ景を表している。

「島影」…島の姿。ここでは鶴江台を島に見立てて言う。宋・韓維「和子華湖上避暑」詩(『南陽集』卷十)に、「島影低回明鏡裏、荷香浮動綠樽中(島影低く回る明鏡の裏、荷香浮動す緑樽の中)」とある。

「寒潮」…冬の波。冬の海を言う。唐・吳融「西陵夜居」詩(『全唐詩』卷六百八十四)に、「寒潮落遠汀、暝色入柴扃(寒潮は遠き汀に落ち、暝色は柴扃に入る)」とある。

斜めに差す夕陽は、網を干すのに好都合で、鶴江台の半分が、赤く染まっている。

島影は水面に映り、いつまでも波に揺れ、

その冷たい冬の海の波は、はるか彼方の空にまで湧き上がっている。

おわりに

今から三百年以上を遡る元禄六(1693)年、二十八歳というあまりに短い一生を終えた山田原欽の「萩八景」詩の訳注を作成した。未だ十分な資料収集の叶わぬ中で、見切り発車の形となってしまったことに忸怩たる思いは残る。しかしながら、最初の一步は何時かは踏み出さねばならず、小さな一步ではあるが、今後への決意表明としておきたい。忌憚なきご指正をお願い申し上げます次第である。

今回の訳注作業を通して感じたことは、「萩」が実に魅力的な土地であるということである。三百年もの時間を超えて、山田原欽が眺め詠んだ風景を共有できる喜びは、萩以外では体験できないものと言える。

萩生まれでもない私が、こうした研究に取り組むこととなったきっかけは、偶然にも萩に住み、萩の方々と知り合えたという僥倖の為せる業である。とりわけ今回の訳注作成に当たっては、萩松陰神社宝物殿の樋口尚樹館長に心よりお礼を申し上げます。

〔註〕

- 1) 『復軒詩藁』では「八江八景」を詩題とする。
- 2) 『復軒文藁』(貞享三年)に載せる「題雲谷等璠家蔵八景軸」に、「八江之地名在人口耳者久矣而未有表章其景也貞享二年之春我太守江公命之以八景之目一得其趣爰命雲谷等璠寫之于画圖安春貞作倭歌余賦唐絶」とある。なお、『復軒文藁』は安藤紀一氏が『復軒詩藁』と同時に山田家より借覧筆写したものである。
- 3) 『中國詩文論叢』(第三十二集) 中國詩文研究會

- 2013
- 4) 萩博物館ホームページ「萩まちじゅう博物館」
<http://machihaku.city.hagi.lg.jp/>
- 5) 史都萩を愛する会『新 史都萩』（第30号）2009
- 6) 大正三年に安藤紀一氏が山田家より借覧筆写したもので、山口県立図書館に所蔵される。
- 7) 天保五(1834)年に木梨恒充が起稿し、山県篤蔵が補正して明治二十五(1892)年に刊行した。1990年に松本二郎の監修によりマツノ書店より復刻本が出版される。本稿の引用はその「八江萩名所図画付録」に拠る。
- 8) 沈括『夢谿筆談』（卷十七）に載せる画題（同時に、詩題でもある）を、各詩毎に語釈に示した。
- 9) 村田峰次郎編『長周叢書』（マツノ書店 1991）所収。
- 10) 山田原欽の詩については全て『復軒詩藁』に拠り、（ ）で制作年を示した。
- 11) 松浦友久編 大修館書店 1987
- 12) 1960年完結初版
- 13) 萩藩絵図方であった有馬喜惣太が六代藩主宗広の御国廻に際して作成した折本仕立て全七帖の道中絵図。寛保七(1742)年作成。山口県文書館の編による『絵図でみる防長の町と村』（1989）に所収される。
- 14) 「淡彩八江萩八景図巻」に記載された萩八景詩（八江八景）は、以後諸本に採録されるが、複数の文字の異同を生じている。これについては別稿を予定している。
- 15) 其一「小亭夜雨」の自注に、「内藤家夫人堂後有亭命臣賦八景詩」とある。
- 16) 『防長風土注進案 20』（山口県立山口図書館 1964）
- 17) 其一「瀟湘夜雨」の自注に、「画工狩野某図八景請賛」とある。
- 18) 小倉尚齋「山田復軒先生行状」（『長周叢書』所収）に、「十四歳国君吉就公(中略) 召先生見之深奇其才即命従入東武旦暮講論経籍」とある。
- 19) 慶安五(1652)年に作成された萩城下町の絵図。萩市郷土博物館所蔵。萩市郷土博物館友の会により複写版が作成されている。
- 20) 「新 史都萩」（第30号）では「升」に作るが、『新書道字典』（二玄社 1985）及び『古文書判読字典』（柏書房 1988）に拠り「竹」に改めた。
- 21) 『長周叢書』所収。村田春信（峰次郎）の跋文参照。
- 22) 『八江萩名所図画』（二之巻 夏之部上）の「古川筋」に拠る。
- 23) 樋口尚樹「萩八景～歴史と変遷～」(平成20年度市民講座)のレジュメに拠る。
- 24) 『絵図でみる防長の町と村』（山口県文書館 1989）所収「近世防長の絵地図の世界」。
- 25) 前掲(23)参照。
- 26) 松浦友久編『漢詩の事典』（大修館書店 1999）p.653
- 27) 萩郷土博物館所蔵。『萩図誌』（萩青年会議所 1978）に縮小版が掲載されている。